水域

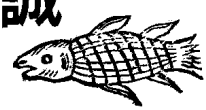
shiina
makoto

椎名誠

水域

shiina makoto

椎名誠



講談社

椎名誠　昭和19年東京に生まれる。
情報センター出版局から『さらば国分寺書店のオババ』『哀愁の町に霧が降るのだ』を相次いで刊行し、一挙に注目される。
主要著書に、『もだえ苦しむ活字中毒者地獄の味噌蔵』（本の雑誌社刊）、『蚊』（新潮文庫所収）、『岳物語』、『アド・バード』（集英社刊）、『フグと低気圧』（講談社文庫所収）、『活字のサーカス』（岩波新書所収）、『犬の系譜』、『ねじのかいてん』（講談社刊）等がある。

水域

1990年9月5日　第1刷発行

著　者　椎名　誠
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
定　価　一三〇〇円（本体一二六二円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問合せは、文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。
©Makoto Shiina 1990, Printed in Japan

ISBN 4-06-204467-6（文1）

水
域

裝幀　菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

背中がまたじくじく濡れてきているな、ということを男はいまいましい半覚醒状態の中で、背中の濡れと同じようにじわじわ意識した。たっぷり寝足りてはいたが、起きるのが面倒だった。もうすこし今の睡りのやすらぎの中でじっとしていたかったのだ。けれど実際のところは数分前に、〝耳〟から起きている――ということも男は知っていた。まだ充分浮力のある流木か木箱のようなものがハウスの艫のあたりにコツンと当ったのだ。長い〝ハウス〟の生活は否応なく男の感覚を鋭敏にしていたから、繊細な夜明けのまどろみの、このような時間には、ちっぽけな小枝がハウスのどこかに触れたとしても、男の耳は確実にそれをとらえてしまう筈だった。

「ハウスだと。なにがハウスだ……」

男は目をつぶったまま、自分の想いの中で薄く嗤った。
おれの家はただの腐れ木の揺れて漂う流れ舟なのだ。と、男はそろそろ蒼い夜明けの色が薄布に染りはじめている天井の明りとりのあたりを眺めながら思った。
誰が言いはじめたのか、一人か二人用の小さな鬼曳舟を、流域の人々はハウスと呼んでいた。長さ五メートル、幅二メートルに満たない鬼曳舟は、舟と呼ぶのも気がひけるほどの単純な組木筏で、そのまん中に粗末な木造の小屋があった。小屋といってもヒトがせいぜい二人、足を伸ばして横になれる程度の広さだったから、男は「寝箱」のようなものだ、と思っていた。寝箱であっても、風や雨や、いくつかのいやらしい吸血魚、そして人間の温もりを奇妙に好む迷惑な水棲動物などが這い寄ってくるのを防げるしっかりした壁とひらき戸をもっているのが嬉しかった。
ただ、男の〝ハウス〟は少々古くなりすぎていた。一ヵ月ほど前に北域の怒奔流を乗りこえたあたりで、偶然見つけた人なしの鬼曳舟を、男はやはりそれももう相当に年代物で沈没寸前の小さなディンギイから乗り換えたのだ。
人なし舟は、すこし前まで誰かが乗っていたのはあきらかで、そいつの生活用品が小屋の中にそっくり残っていた。持ち主が消えて数日の間漂流していたらしく、開けはなされた入口から数匹の巨大な黄泡長虫が入り込んでいて、散らばった衣服や寝袋の中にねばねばした巣をつ

くっていた。しゅうしゅうと怒って大量の捻転液を吐きだすアブクダシに辟易しながら、男はシデ棒を使って小屋の中の物を強引に掻き出し、流れの中に捨てた。風を入れて二日ほど乾かし、夜は甲板に火をたいて新たな闖入者を防ぎ、漸く自分の小屋にしたのだ。

男はそれからしばらく、ディンギイをうしろに曳きながらゆったりした黒水南流を下り、一週間目にディンギイを浮島の男に売って、その鬼曳舟を本格的に自分の物にした。

男がそうやって手に入れた時点でハウスはすでに大量の水を吸っており、吃水は間もなく甲板のラインに迫ろうとしていた。けれど男は長さ三メートルに満たない小さなエンジンなしのディンギイで風にもてあそばれる日々から較べたら充分に有難かったのだ。

問題はそろそろハウスを水から上げ、何日間か風と太陽にさらして乾燥させないと、間もなくハウスの内側まで水が上がってきてしまうだろう、ということだった。ハウスは太い三椏宿根木で造られており、その樹の中に含まれている沢山の空気玉がもう殆ど再生浮力を失うところまで滲透圧を受けているはずだった。

流れの中で、男はちょっとでも接近可能な擬態藻や浮根塊など流木寄生樹を見つけると、乾いた枝葉を切り取って小屋の床に敷いた。シートをかぶせて、その上に寝るとすこしの間は快適にすごすことができた。けれどハウスはもうすでにそのあらゆるところが水を含んでどろどろの水船のようになっているようだった。いくら乾いた草や藻を大量に敷いても、一晩すぎる

頃にはたいていシート地を越して寝袋の中まで水が上がってきていた。

男はのろのろした動作で寝袋をはぎ、顔をしかめながらのっそりと上半身をおこした。ハウスの周囲に重い水流がぴしゃぴしゃはじけている音が聞こえていた。小屋の天窓にあたるところに苦労して貼った混綿シートはさっきよりもさらにまた明るさを増している。

男は早く小屋の外に出て外の様子を見たかった。一晩中ハウスは順調に流れていたようだったが、果たしてどれほどの距離を進んだのか、新しい水流に乗ったばかりだったので見当がつかなかった。

数週間前に円環流が複雑に交叉しているＴＯＲＯＯと呼ばれる水域に入ったとき、男はえらくけたたましい音をたてて帆走してくる双胴カヌーに乗った老人に会った。

老人は木製の大型カヌーとＦＲＰでできた三層密閉式のシーカヤックを数本の防蝕性合金パイプで器用につなぎ、その上に小さな居住スペースをつくっていた。帆は中央に一本ややかしいだ恰好で立てられており、そのてっぺんにラッパ型のスピーカーが取りつけられていた。

騒々しい音は、そのスピーカーから聞こえているらしい、ということがわかり、男はすこし唖然として、その奇妙なフネが追いついてくるのを待った。

ラッパ型のスピーカーは何をやっているのかあまりよく聞きとることのできない、単なる騒

音のようなものをけたたましい音量で流しているので、そいつが近づいてくるにつれて、男はおそらく気の狂った人間が乗っているのだろうと思った。

けれど老人は、たくみに帆の角度をあやつって、流れを逆にさかのぼり、男のハウスに接近してきた。

顔がわかるようになったところで、老人は片手をあげ「武器はなしだ。老人だし、何もするな」と、びっくりするぐらいの大声で言った。

スピーカーからのけたたましい音はそのままなので、男も大声をあげなければならず、男はこういう場合まず何と言うべきなのかすこし迷いながら、仕方なしに「どこからきた。あんたはどんな人だね」というごくごく当り前のことを言った。それから、自分も老人に負けないくらいの大声を張りあげていることに気づき、スピーカーを指さし、それから自分の耳を押さえるしぐさをした。

老人は器用に帆を収めながら、背曲魚の大きくて丸い吸盤のように異常に赤い口をほこほこひらいて何事か叫んだ。しかしそれはまたひときわどんと大きくなったスピーカーの音に消されて殆ど聞きとれなかった。

それから老人はふいに手元の機械を操作してスピーカーの音を止めたので、その瞬間にあたりは気恥ずかしくなるほどの静寂に包まれてしまった。

そのために男と老人はふいに黙って顔を見合わせ、それから数秒してごく自然に、そして同時に笑った。

「ひゃっひゃっひゃっあ……」

と、老人は殆ど歯のない赤い口をあけて笑い、男もつられて笑いながら、こうして静かに屈託なく笑うのは久しぶりだな、と思った。

「もう年寄りだ。武器なんか出しちゃいけませんよ」

と老人はまた同じようなことを言った。それから三つ叉のシデ棒を出して、男のハウスの舷側にがっちりとそれを引っかけた。

男と老人はそのままの、ゆるやかな流れの中で二隻並んで大きく一緒に回転しながらしばらくの間話をした。

「どこからやってきたのか」というのが男と老人がともに最初に聞いたことだった。

「どこもまあ、このあたりはみんなおんなじだよ」

と、老人はぐるぐるせわしなく空や遠くの雲を眺めながら言った。

「商売はたいしたことはできない。売り手の方が多いからな。流れがずっと強くて波も殆どたたないから、ここから向こうの連中は何も考えなくていいのさ。魚はあぶらくさいけれどまあ楽に獲れる。人殺しもこの頃は滅多になくなって平和なもんだ。だからどこか別のところに行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こうとは思わないな。年寄りだからもうこのまわりのことでみんな満足なんだよ」
老人はひゃあひゃあと息苦しい笑い声を時おりまじえながら長い時間をかけて喋(しゃべ)った。男は「余計なことだが質問していいか」とことわったあと、どうしてスピーカーからやかましい音を出しているのか、ということと、そのやかましい音は何なのか、ということを聞いた。
老人はまたひゃあひゃあとあえぎながら笑い、「景気づけだ。こうやって走っていると気分がいいのだよ」と言った。それからスピーカーから流しているのは『ネバークライウルフ』だ。ただもう古すぎて音も自分みたいにぼろぼろになってしまったから、こうして無理に大きくするとあんたにわからないかもしれない、ということをまた長い時間をかけて言った。
老人はそのあと、居住甲板の上の赤っぽい防水布の中をごそごそやって、油布にくるんだ一ダースほどのバッテリーと、プリズム屈折式の小さな双眼鏡を引っぱりだし「ほしくないかな」と言った。
バッテリーはまったく必要なかったが、双眼鏡は大いに興味があった。手にとってみるとずしりと重い本物だった。相当に古いがよく使いこまれていて手の中にうまくなじみそうだった。Carl Zeiss 8×16という彫り込みが錆(さび)の中に読みとれた。くるくる回し、レンズの傷とネジの締まり具合を調べた。それから接眼レンズのピント調節を回してみた。すべては申し分のない品物だった。顔をあげると老人はすこし赤っぽく見える両眼を落着きなくしばたたかせながら

筒の太いポンプ式のスプリング銃をかまえて、男の首のあたりに狙いをつけていた。
「すまないが一応の用心というだけだ。こういうものを見せると急に目つきが変るやつがけっこういるもんでな。それでもってこっちはこういう年寄りなもんでな」老人は弁解するように言った。
老人の持っているスプリング銃は前にも何度か見たことがあった。スプリングを使って尾筒部の管状タンクに圧縮空気を溜め、その反発力で六ミリの円筒弾を発射する古めかしいシステムで、たいした威力はなかったが、いま男と老人の向かいあっている距離で撃たれたらちょっとひどいことになりそうだった。
「いくらで売るのかね」
と、男が聞いた。
「金よりも、何か面白そうなものと交換というのはどうだね。たとえば高圧密閉式の鍋とか、まだ壊れていないバッテリー式の送信機とか、一度も濡れていない寝袋とか、そういったものはないかね」と、老人は空いている方の手で自分の鼻をぐにゃぐにゃつまみ、前よりもずっと明確な口調で言った。
長い時間をかけた駆引きで、結局男は自分の持っている物のあらいざらいを老人におしえる、という結果になった。男は話しながら自分が何も交換に値するものを持っていない、というこ

とを知った。そこですこしやけになり、言うだけ無駄だろうと思いながらも最後に昔のディンギイ時代の壊れた四十馬力の船外機を引っぱりだした。老人はそいつをしばらく眺め、意外なことにそれでうけあう、と言った。

老人は別れしなに、ハウスの小屋の入口を眺め「あんたの名前はハルというわけだ。すぐに忘れるだろうけれど、憶えてみるよ」と喘ぐような耳障りな笑い声の中で言った。それから再びけたたましい音楽を鳴らし、上手に帆をあやつって、TOROO水域の流れをさかのぼっていった。

男は思いがけない取引きで願ってもない双眼鏡が手に入ったことを静かに感謝した。このハウスを手に入れたことと、双眼鏡を手に入れたことで、男は自分の流れていく方向がしだいによくなってきているらしいと感じた。そして老人の言っていたようにハウスの入口に彫り込んであるHARUという名前を当分名のっていくことにしようと思った。子供の頃からの自分の名前は愛着をもったものがあったが、一人で水域を流れていく者にとってはそんなものはどうでもいいことだ、と思った。

ハルは湿った寝袋を手早く丸め、小屋の中のいつもの棚の間に押し込んだ。もう何時間かして太陽の光がきっちりぬくもりをもってきたら、いつものように小屋の屋根の上にひろげて干

すのだ。

その棚のひとつ上、日常生活で使う最も重要な物を入れておく扉つきのボックスをあけて、Carl Zeissの双眼鏡を引っぱりだした。新しい水域に入って流れのスピードが増したとき、ハルは前甲板に出て、その双眼鏡で目の前の新しい風景を眺めるのをいつも楽しみにしていた。

戸をあけると、夜のうちに前甲板に上り込んでいた数匹の胴長トサカウオが大あわてでくねくねと身をよじり、甲板の隅に逃げた。それから低い船ばたの木枠を乗りこえ、チロチロとハルの様子を窺いながら水の中にとびこんでいった。

低い雲が南西方向に流れていた。上空は風が強いようだったが、ぼんやり拡がった目の前の流れとハウスの周辺には昨日と変らない一面の黒い水があった。

斜め前方に緑色の浮遊物が見えた。ハルは素早く双眼鏡をそちらに向けた。流れ藻のかたまりか、浮島のちぎれたものか区別がつかなかったが、ハルの舟と同じ速度で進んでいるようだった。その向こうに白っぽくて平らなものが浮かんでいた。そこからでは二つの浮流物の距離がよくつかめなかったが、もしかするとあの浮島か流れ藻の下にほてい袋の親がひそんでいる可能性があった。あの白い物がほてい袋の引いている巨大な捕獲網だとしたら、なんとしてでもつかまえておきたいところだった。

ハルは小屋の壁に厳重にしばりつけてあるロープをほどき、螺旋篭を後甲板の漕ぎ穴に落

とし込んだ。それからギアボックスの先についている手回しハンドルを回し、スチームダック式のオールを回してハウスにゆったりとした推進力をつけた。方向を変えたハウスの船端にざわざわと密度の濃い水流がからみつき、小さな渦をつくってハウスに新しい推進力の加勢をした。

太陽の光が遠くの薄雲を抜けてひらりとあたりの水面を照射した。黒い水面にわずかにオレンジ色がかったするどい光が走り、同時につめたい風がハルの頭上で躍った。がらがらとひどく牧歌的なスチームダック式のオールの音をたてながらハルのフネは進んでいった。二十分ほどで大きい浮遊物は古い流れ藻らしい、ということがわかった。

ハルはハンドルを回しながら、近づいてくる二つの浮遊物を双眼鏡で調べた。双方の距離は五十メートルほどのもので、白い浮き物はほてい袋の捕獲網である可能性が強かった。ハルの胸が踊った。

流れ藻の周辺でおびただしい数のアミトビが興奮してひゅんひゅんと水面からはじけ飛んでいるのが見えた。流れ藻の大きさは直径十メートルほどもあり、その周囲には水棲の食虫植物どもがびっしり繁殖し、自分たちの棲む流れ藻のまわり中にさまざまな形をした擬態虫やオドリバナなどの防御帯らしいものを丹念に張りめぐらせていた。

流れ藻のお盆のようになった中央のあたりにはコメツガがひと叢ほど生えているようで、ま

だ実がふくらまずいくらか青い穂が首を揃えて困ったようにおじぎをしていた。見たかんじでは乗り移れそうだったが、この時期はどんな毒虫や吸血生物がひそんでいるかわからなかったので欲をはらず、ほてい袋の親だけを狙うことにした。

ハルのフネはそのまま五十メートルほど先に浮かんでいる白い浮遊物に接近していった。黒い水面から十数センチほどの厚さで浮かび上がっているハルのフネをひと回り小さくしたくらいの白いぶよぶよしたしろものだった。思ったとおりそれはほてい袋の巨大な捕獲網であった。ハルのフネが接近してきたので、ほてい袋の親は、コメツガのある流れ藻の下で激しく動き回り、そこから伸びている細長い筒くだを大あわてで回収しようとしていた。けれど自分の体が引いて浮かべている巨大な捕獲網をもし本当にそっくり巻きとるとしたら三、四日はかかりそうだった。

ハルはシデ棒を出して、ほてい袋の親からつながっている筒くだを水の中から掻き上げ、ナイフで切った。

流れ藻の下にやってくるおびただしい数の小魚やプランクトンを呑み込んで遠くの網まで送り込むための筒くだは、ある種の水面卵生魚が孵化する時のようにびくびくと絶え間なくうごめいている。ハルは切り取った筒をゆっくり引いていった。ほてい袋を丸ごと獲ったのはそれがはじめてだった。この獲物に出会うというだけでもけっこう難しいから、ハルはやはり自分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com